

富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター

# Center News

Center for Educational Research and Practice  
Faculty of Human Development, University of Toyama

第31号

(2014年7月10日発行)



学習環境研究部門研究会（授業におけるタブレット端末の活用はどうか、6月）

~~~~~ センターニュース第31号 目次 ~~~~~

- |    |                |                 |        |       |
|----|----------------|-----------------|--------|-------|
| 02 | 巻頭言            | センターへの期待        | 学部長    | 神川 康子 |
|    | 挨拶             | 教育改革のフォーラムに     | センター長  | 山西 潤一 |
| 03 | 挨拶             | 一人一人が教員として輝くように | 教職特任教授 | 戸成 博宣 |
|    | 挨拶             | 日々、成長を願って       | 教職特任教授 | 星野 正義 |
| 04 | 平成26年度のビジョンと計画 |                 |        |       |
|    | • 教育工学研究部門     |                 |        |       |
|    | • 学習環境研究部門     |                 |        |       |
|    | • 教育臨床研究部門     |                 |        |       |
|    | センター客員教授       | 本多 信昭           |        |       |
|    | センター客員教授       | 寺西 康雄           |        |       |
| 07 | 報告             | 内地留学を経験して       |        |       |
| 08 | 編集後記           |                 |        |       |

## センターへの期待

人間発達科学部 学部長 神川 康子



教員養成系大学のミッションの再定義から遅れることほぼ半年。一般学部となった人間発達科学部も平成26年3月にはミッションの再定義が確認されました。この中で本学部は、乳幼児から高齢者に至るまでの人の発達を支援する「広義の教育」人材の養成、「人を教えるヒト」を育てることを目的とし、教員養成機能を持った人間発達科学部を設置したと、設置目的に記されました。

また、平成23（2011）年には人の生涯にわたる発達の支援・促進と発達の環境条件の改善・充実を担う「広義の教育」人材の養成と現職教員の再教育を目的として人間発達科学研究科を設置したことも確認されています。

その社会的な役割は、教員養成と現職教員の資質向上に資することだけではなく、保育士、社会福祉士、認定心理士等の資格を目指す学生達が将来にわたって、人々の暮らしを支え、社会に貢献していけるように、効果的な教育や支援をしていくことだと考えています。

ここで、人間発達科学研究実践総合センターでは、「心と教育の相談」、「子どもとのふれあい体験」、「附属学校園との共同研究プロジェクト」等々において、日常的に、日々多様な社会的役割を果たして下さっています。

現在、「1県に1教職大学院」との文科省の政策のもと、教職大学院設置の準備に入っていますが、教員養成機能をもつ一般学部としてのミッション遂行の好適なチャンスと考えています。生涯、人を育てるに関わる教育人材育成に貢献できる学部・大学院として、教育委員会との協力のもと、教職員一丸となって、人間発達科学部・研究科と、教職大学院（全学）の両立、協働を目指したいと考えています。

このときに、センターのこれまで果たしてきた役割や力は、大いに頼りになります。今後とも、教育現場や地域と密着している本センターの益々の発展を期待しています。

## 教育改革のフォーラムに

人間発達科学研究実践総合センター長 山西 潤一



この4月からセンター長を拝命した山西です。思えば、国立大学教員養成学部の附属研究施設として、全国で8番目に設立された教育実践研究指導センターに着任したのが、昭和57年です。当時の教員養成学部にあっては、今も同じだと思うのですが、その使命は、いかに教育技術の高い優秀な教員を育てるかでした。そのため、授業の上手な教師の授業行動を分析し、授業づくりや教育方法のポイントを明らかにするため、映像機器やコンピュータがセンターに設置されました。今はありませんが、センター2階のマイクロティーチング室には、校務を終えた先生方が、夜な夜な集まり、授業づくりや教育談義に花を咲かせたものです。県の教育長をされた後、教授としてセンターに赴任された屋敷平州先生と、「センターを、教育現場と大学をつなぎ、現場の実践知を理論化し、教育技術伝承のフォーラムにしたいですね」と話し合ったことが懐かしく思い出されます。

時代の流れの中で、センターの役割も広がり、今では、学校教育課題としての、授業づくり、心の問題、ICT活用等に対応すべく、学習環境、教育臨床、教育工学の3部門に4名の専門家が教授・准教授として配置されています。また、教員を目指す学生の資質向上を支援するため、実践経験豊富な3名の客員教授もお願いしています。皆それぞれに、各自の専門性を活かしながら、日々、学校課題解決に取り組んでいます。

学部では、教員養成機能のさらなる強化に向け、教職大学院構想が進んでいます。現代的教育課題の解決に向け、センターが、これまで取り組んできた実践研究の成果や人的ネットワークも、この構想の中できっと役立つものと思います。現場の先生方はもとより、何より理論的教育研究を進めている学部の先生方とともに、センターが教育改革を進めるフォーラムになるよう、初心に帰って努力したいと思います。皆様方のご支援御鞭撻の程、どうかよろしくお願い致します。

挨拶

## 一人一人が教員として輝くように

教職特任教授 戸成 博宣



赴任初日から「志願票について指導してください」と来る学生たちの学ぼうとする姿に圧倒されています。教員の志望動機や自己PRを熱く語りながら、少し不安な様子。「書いたことから、ひとまず離れよう」と促し、「そもそも教員になろうと思ったルーツはどこにあるの?」「あなたのよいところを伝えてみて!」などと言うと、戸惑いながらも、自分の過去を手練り寄せるように語り始めます。

「すごいね。そんなことがあったの。」「いいね。それってあなたにしかないよさだよ。」と返すと、次第に目が輝いてきます。自分自身をありのままに語り、私の言うことを素直に聞き入れ、お礼を言って礼儀正しく去っていく学生の後姿には凜とした雰囲気があります。これまで先人たちが築いてきた教育の歩みを、こうした学生たちが受け継いでいくのかと思うと、力強さと頼もしさを感じました。

NHK連続テレビ小説「花子とアン」のブラックバーン校長は、卒業式で次のように語っています。

私の愛する生徒たちよ 我とともに老いよ 最上のものは、なお後に来たる。

今から何十年後かに、あなた方が学校生活を思い出して、

あの時代が一番幸せだった、楽しかったと 心の底から感じるのなら、

私はこの教育が失敗だったと言わなければなりません。 人生は進歩です。

若い時代は準備の時であり、最上のものは過去にあるものではなく、将来にあります。

旅路の最後まで、希望と理想を持ち続け、進んでいくものでありますように。

微力ながら、子供たちの元気・やる気に負けないたくましい教員の育成に尽くしたいと思います。

挨拶

## 日々、成長を願って

教職特任教授 星野 正義



この4月より、教職特任教授として勤務することになりました。

私は38年前に富山大学教育学部を卒業し、小学校2校に8年間、中学校3校に23年間、教育機関に7年間、通算38年間教育に携わることができました。その間、よき上司、よき同僚、そしてよき子供たちに出会い、私自身が日々成長できたと感じています。その中で、私が特に成長できたと感じる二つのことがあります。一つ目は、教員5年目に公民館の青年学級主事として5年間、地域社会の様々な方と出会えたこと、そして、二つ目は、中学校の部活動で、他校の先輩教師との出会いです。振り返ってみれば、多くの方々が私を成長させてくれたものと感じています。

大学時代は、卒業論文のテーマとして「富山県庄川扇状地鴨川におけるトミヨの成長と成熟」にいて研究しました。トミヨを水槽で飼育していたため、エサやり（生き餌しか食べない）や水槽の水温調整のため、日曜日も含め毎日大学に来ていました。勉強だけでなく、友人との語らい、週6日間の部活動にと、家族のことを忘れて大学生生活を楽しんでいたように思います。この4年間の経験が、教員となっても十二分に生かされたと感じています。

これらの経験をこれから社会に巣立つ学生の皆さんに少しでも伝えることができれば幸いです。

# 平成26年度のビジョンと計画

## 教育工学研究部門

教育工学は、教育改善を目的とした研究開発を行う学際的研究領域である。人間発達科学研究実践総合センターの教育工学研究部門においては、教育実践に貢献する研究開発が主な目標となる。平成26年度は、教育実践演習室の情報環境の充実と、それを利用した教育実践研究を行っていくと共に、教育現場と協力した情報教育の実践研究を展開する予定である。

所属教員の専門性（教育心理学）を考慮し、自己調整学習や学習方略の獲得に関する実験研究や調査研究を中心に、教育改善に結びつく教育方法の研究を行っていくことになる。具体的には、以下のような研究が含まれる。（ ）内は平成26年度の行動計画である。

- 情報教育に関する研究（平成28年度版の情報処理の教科書の改訂）
- e-Learningによる学部ならびに大学院の授業の改善（学部教員への啓蒙活動）
- 思考ツール、反転学習や協働学習などの教育方法に関する研究（教員研修プログラムの拡充）
- 大学生ならびに現職教員を対象とした情報活用能力の育成方法の研究
- 心理学教育の研究など

部門の業務としては、センター内の情報基盤の整備と管理運用、ならびに教育用情報機器の利用促進と管理運用を行う。また、実践総合センターのネットワークを利用した教育研究の拡大に貢献し、他大学との交流や共同開発を行う。平成26年度は、センターホームページの内容の充実に取り組む。

教育面として、教育工学研究部門の教員は、学部ならびに大学院の教育の中で、教育工学や情報教育、教育評価、研究計画に関連する授業を担当し、教員養成ならびに研究者養成に貢献する。

## 学習環境研究部門

昨年度に引き続き、授業におけるICT活用についてタブレット端末の活用を中心とした研究を進めます。県内小中学校等の先生方と連携し、授業実践を通してICT活用の効果を明らかにし、その成果を当部門の研究会等で報告します。本年度は当部門の研究会を6月と11月に計画しました。6月の研究会についてのご報告は下のとおりです。11月の研究会については、京都府亀岡市立南つつじヶ丘小学校の広瀬一弥先生による講演も行う予定です。このような活動を通して、ICT活用の在り方について県内の先生方に役立つ内容を提供していきます。

### 授業におけるタブレット端末の活用はどうあればよいか － ICT活用の効果や授業実践例から考える－

6月28日（土）、人間発達科学部111教室で標記の研究会を行いました。

まず、金沢市立安原小学校の小林祐紀様から、「21世紀にふさわしい学びのためのICT活用－協働学習の



---

ためのタブレット端末の活用を中心に」のテーマで講演をしていただきました。小学校における実際の授業の中でどのようにタブレット端末を活用すればよいかについて、その考え方や実際の活用例について詳しく知ることができました。

次に、Benesse Group（株）ラーンズ基盤戦略部の伊藤純様から、「高校における『1人1台環境』での教科指導の実践－佐賀県立高校での実証実験を通して－」のテーマで情報提供をしていただきました。高校へのタブレット端末導入に向けての実証実験の結果等について参考になるお話をたくさんお聞きすることができました。

さらに、富山県内を中心とした小学校の先生方によるタブレット端末の活用等にかかわる研究発表が4件ありました。音楽科、国語科、体育科におけるタブレット端末のビデオ機能を活用した授業実践の成果、さらに、先生方からタブレット端末について理解してもらうための校内研修の進め方に関する発表をしていただきました。

当日は、小中学校等の先生方、教員を目指す学生の皆さん、タブレット端末の活用に関心のある方、約70名の参加があり、大変有意義な会となりました。

---



## 教育臨床研究部門

教育臨床研究部門では、二人の准教授が所属しており、部門として学校適応や心理的適応を研究している。現在、部門では子どもの感情機能を含めた心理教育に関する研究を行っており、それに関連するテーマで「発達と臨床の公開講座」や「スクールカウンセラー研修会」も開催してきている。研究と実践のリンクを目指し、また研究で得られた知見を子どもたちと実際に関わる現場に伝えていくための活動を引き続き行い、実践センターの役割を果たしていく。具体的なビジョンと計画は以下に記す。

### 【研究および内地留学生の受け入れについて】

現在行っている研究の柱は「心理教育」であり、2年前から始められている。これまでもストレスマネジメントやSST（Social Skills Training）などのプログラムが存在していたものの、それらを一層生かし、発展させていくためには、「認知」や「行動」だけではなく、「情動（感情）」という側面を統合していく必要性が挙げられている。すでに、教育臨床研究部門では、子どもの情動知覚や情動評価に関する研究を継続してきており、それらの結果は、共同研究として複数の学会で発表されてきた。今年度も情動評価に関する基礎的研究を行う。また、教育臨床研究部門では現職教員の再教育として年間10名程度の内地留学生を受け入れている。すでに、内地留学生在が実践研究の一環として行った心理教育に関する介入研究は複数蓄積されており、そのうちのいくつかは実践センター紀要に掲載されている。内地留学学生への指導は、講義の聴講のみならず、研究指導を含めて行われている。今後も学校臨床に関する知識を生かした教育を推進し、また研究を通して自らの実践を振り返ることができる能力を身につけた教員養成に寄与していく。

### 【地域と大学のリンクについて】

上記と研究に関連する講演会の継続も引き続き行っていくこととなる。ここ数年「マインドフルネス」「家族」「学校適応」「スクールカウンセリング」「心理教育」といったキーワードに関連する学校教員やスクールカウンセラーを対象とした研修会を年に2回程度開催してきており、今年度も教室の中で苦戦しやすい「発達障害」への心理教育について、ソーシャルストーリーを含めた講演会をすでに企画している。大学と富山の教育をつなぐための講演会も引き続き行っていく予定である。

---

---

## 平成26年度 “先生になりたい” 学生への指導ビジョン

---

センター客員教授 本多 信昭

私は、教員採用試験対策ガイダンスと学びのアシストメール報告・相談を主たる任務として活動している。

教員採用試験対策では、自分の実体験を基にしたオンリーワンの志願票作成を目指してきた。個別面接で体験を発掘し具体的な事実を探すのであるが、記憶に残ることすらないという言葉が返ってくる場合が多い。志願票で、各自が教育に懸ける情熱をたぎらせる文章を書くには、1年次から教育に興味を持ち、取材のための観察能力、文章化練習が必要と考え、今年度学びのアシストの報告指導全般について次のようなビジョンで実践する。

- 体験の中で、自分の心が動かされた言葉、事象を一つ探し、それを起点に、なぜそれを選んだか、その後は次々と考えた順に文章化していくことを通して、具体的事実を基に文章を書く技術を身につける。  
そのために、次のことを行う。
  - ① 自分の心が動かされた体験は、関連するいろいろな言葉や事象をまとめた言葉で表現する機会が多いが、代表する一つの言葉、事象で表現する。これを起点として考え、連想したことを文章化する指導。
  - ② 自分の心が動かされた体験を発掘するため、学習中、遊びの中で「子ども目線」の観察を行い、子どもの心理を大切に共に活動するための指導。
  - ③ ホームページ“先生になりたい”の改善として、各種研究会など教育的なイベント情報を多くし、教員志望の意欲を現実的な活動に結びつける参加を促す働きかけ。

---

## 平成26年度計画について

---

センター客員教授 寺西 康雄

従来、週1回、内地留学生対象のセミナー（カウンセリングに関する文献講読や発表・討論）と実習（けん玉を活用したプレイセラピー〔けん玉セラピー〕の体験学習）を実施してきた。

今年度は、これまでの取り組みを踏まえて、次のようなビジョンを描いている。

- セミナー及び実習後、内地留学生と担当教員がメール交換を通して、学びの深化・発展を図るとともに、担当教員と内地留学生及び内地留学生相互のつながりを深める。
- セミナー及び実習の場に話題提供者として、いじめ・不登校・場面緘黙等経験者を招き、体験談を聴いたり、共にプレイしたりすることによって、カウンセラーとしての実践力を高め、資質の向上を図る。
- 教育相談機関等への訪問研修、講演会・研修会への参加、芸術文化作品の鑑賞などを通して、幅広い識見と豊かな人間性を培い、将来の富山の教育を担っていくにふさわしい人材の育成を図る。

## 内地留学を経験して

小矢部市立石動中学校 往蔵 雅人

何か嫌なことがあって泣く我が子（小2）に対して、「うるさいなあ、泣かんが。我慢しよ。」とつい言うてしまうことがある。しかし、このように自分の感情を表現するチャンスを大人が奪っていくことが、その後の成長にいかにも悪影響を及ぼすかを学び、反省させられた。以前担任した生徒の中に、友達に対してひどいいじめを行う子がいた。両親ともに遅くまで仕事をしている家庭で育った子で、嫌なことがあってもその思いをぶつけるところもなく、自分の中にモヤモヤとした気持ちを押し込めてきたのかもしれない。そのような行き場を失った負の感情が、彼女の中でグツグツと煮え、ドカンと噴火した結果のいじめとみることもできる。当時、私はその家庭環境にのみその原因を求めていたように思う。しかし、今から思えば、担任である私自身が彼女としっかりと人間関係を築き、彼女が気持ちを適切に表現することができていれば、そのようなことにはならなかったように思う。自分の感情を楽に出せる相手がいる、気楽に話せる瞬間があることがとても大切だと改めて感じている。悩みを「話す」ことは、モヤモヤとした思いを「放す」ことであり、また、それは自分の中に押しこめてきた負の感情を「離す」ことになる。以前知人から聞いた言葉が、いま改めて思い出される。

魚津市立西部中学校 中川 晶子

内地留学が始まる前は大学での生活が想像できず、緊張と不安な気持ちでいっぱいでした。しかし今では、程よい緊張感がありつつも、新鮮で充実した日々を送らせていただいています。この内地留学でまず感じているのは、学ぶこと、知ることの楽しさ、大切さです。講義を聞いて、初めて知ることがあったときそれが自分の中で過去の経験と結びついたとき、「そうか！」と、目の前が開けたような明るい気持ちになります。その一方で、もっと早く知っていたら、あのときこんなふうにはできなかったのではないかという、後悔が湧き上がることもあります。今まで忙しさを言い訳に、流されるようにして教員生活を送ってきたように思います。3か月という短い期間ではありますが、ちょっと立ち止まり、いろいろなものを見て、聞いて、学び、考える機会をいただけたことをありがたく感じています。学んだことを現場に戻ってから生かしていけるように、残りの研修も頑張りたいと思います。

富山県立富山西高等学校 高尾 瞳

学校現場にいた時は、毎日仕事に追われ、正直自分の心に余裕がありませんでした。生徒の言動に一喜一憂し、「なんで？」と悔しい思いをし、自分の力不足を感じる日々でした。大学に慣れ、心に余裕ができた今思うことは、生徒一人一人に対してもクラス全体に対してもっと適切な関わり方や働きかけができたのではないかと思います。子どもたちの問題（課題）となる部分は見えていても、自信をもって助言や支援ができずにはいました。いや、実際は本当の課題すら見えていなかったのかもしれませんが。そのような思いが少しでも解消されて、生徒たちに少しでも還元できるようにと思い、日々を過ごしています。大学で学ぶことすべてが新鮮で、頭の中の「へえ～」ボタンと「ガッテン」ボタンが鳴りやまない状態です。自分自身や子どもを理解する上でとても大切なことを学ばせていただいている中で、現在はストレスと学校適応感について研究を始めました。少しでも生徒の学校適応感を高めるために教師としてできることは何かを考え、子どもたちの将来の自立をサポートできるようにしていきたいと思っています。

## 編集後記

---

センターニュース31号をお届けいたします。昨年度までセンターニュースは年度末に発行していましたが、今回からは年2回の発行としました。今までは年度の活動報告を中心とした内容でしたが、今回からは7月に年度の計画等のお知らせをして、年度末3月にはその報告ができるようにと考えました。

本号は、各研究部門等における年間のビジョンや計画を載せるだけでなく、学部長の神川先生、教職特任教授の戸成先生、星野先生からもご寄稿いただき、充実した紙面構成となりました。本当にありがとうございました。

高い資質をもった教師を育成すること、学部や大学を教育現場と結び、教育における地域連携機能を果たすことは当センターの目的です。この目的達成のために本号に書かれている取組を進めていきたいと考えております。

今後とも、当センターの活動にご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

長谷川 春生



|      |                                                                                           |
|------|-------------------------------------------------------------------------------------------|
| 印 刷  | 平成26年 7月10日                                                                               |
| 発 行  | 平成26年 7月10日                                                                               |
| 編集発行 | 富山大学人間発達科学部<br>附属人間発達科学研究実践総合センター<br>代表者 山西 潤一<br>〒930-8555 富山市五福3190<br>電 話 076-445-6380 |